

# マチスの壁画に会って

永守雄治（蒼穹）

Yuji (Sokyu) Nagamori

フランス・ニースの郊外に小さな美しい礼拝堂があります。ヴァンス礼拝堂といえます。かの巨匠マチスの作で生涯の傑作といわれ、バランス、純粹、静寂の芸術、且つ訪れる何人をも浄化できるように願ったとされるものです。

その礼拝堂の真っ白いタイル張りの壁に、一見書ではないかと見紛う線描画があります。横広の六畳程の大きさに苦悩の道と題するそれはキリストの最後を一から十四の場面に分けて描いてあります。（掲載図1）それぞれの画が何を物語るかは詳しい方に委ねるとして、私が魅かれるのはそこから放たれる書的薫りです。初めて目にした時、一瞬金鎚で殴られるような衝撃を受けました。マチスの書？しばらく呆然とし、これは何だろうと自問自答、一旦離れては戻りまたその前に立ちます。やはり書的なのです。1は線、2は造形、3は空間、心臓をギュッと鷲掴みされて画中に引きずり込まれるようです。

マチスは苦悩を表現するため、このデッサンはグチャグチャなタッチにしたといえます。木炭の強烈な線、そこに軋み、潤濁があり、まさに筆線を思わせます。息づかいが時に激しく、時に緩やかに白いタイルを刮ります。一方造形はシンプルです。同時代の巨匠ピカソはマチスは完全なまでにデッサンを繰り返す画家だと評しました。それぞれの画に添えられた番号さえ細心の配慮で、余白を邪魔しません。圧倒する力にただただ脱帽、しかしそれにしてもこの書的な匂いは、もしやマチスは書に関心があったのではの思いが頭を過ります。残念ながら今に至り具体的資料を見つけられずにいますが。さて帰国して間もなくの作が「一の谷の義経」です。マチスに触発されるとは言いませんが、少し高ぶった気持で取り組みました。牛若丸が源氏の大將として平家に挑む歴史的事象、義経への憧憬を重みのある線で大きく中央に布字し、小書きを添えて視覚的に斬新、より立体感を求めました。温かな表現を心懸けよと常に諭された亡

師の声に、後から押されるように筆を運んだ作です。

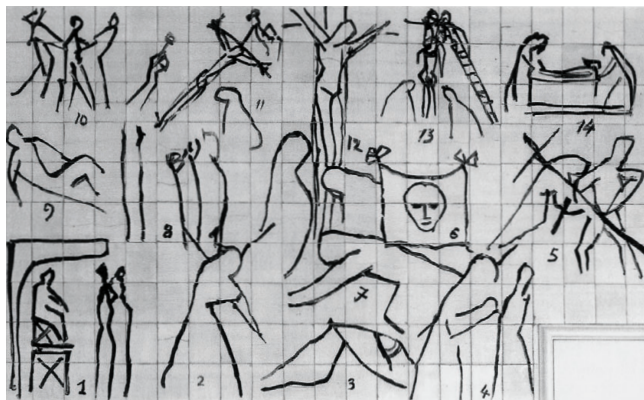
題名 「一の谷の義経」(自作文)

サイズ 5尺×5尺

筆 羊毫筆

墨 和墨

紙 本画箋



掲載 No. 1 マチス「苦悩の道」